

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第20巻 第3号



大 汝 峰

大汝峰（おおなんじがみね）は標高が2,684mで、白山では御前峰について高い山です。この山体の火山岩は、一部表面の部分を除いては、10数万年前に形成されたもので、御前峰や剣ヶ峰を構成するものよりも明らかに古い時代のものです。当時は現在の地獄谷のあたりを頂上とする約3,000mの火山体（古白山火山）があり、大汝峰の岩石はその火山体の南西部を構成していたものです。古白山火山の山体中心部はその後浸食によって失われ、現在は古白山火山の山体の一部を残すのみになっています。大汝峰は、その残された山体の一部で、穏やかな山容をなすのは、長い間の浸食作用によるものです。

「白山の自然」フォトコンテスト

白山国立公園指定30周年記念事業の一つとして、白山の自然に関心を持ってもらうことと、優れた作品を白山を紹介する各種印刷物等に使用することを目的に、白山の自然を対象とした写真を一般募集し、コンテストを行うとともに、入賞作品による写真展を開催しました。

6月に募集を開始し9月30日に締め切ったところ、全国各地の110名の方々から469点もの作品が寄せられました(表1)。また内容は、高山植物や山頂部の景観、御来光など四季にわたるバラエティーに富んだものでした(表2)。審査会は10月14日に、30周年記念事業実行委員会会長(環境部長)並びに、環境庁白山国立公園管理官事務所・白山自然保護センター・吉野谷村・尾口村・白峰村・白山観光協会の代表が集まり開催され、下記のとおり28点の入賞が決まりました。全入賞作品による写真展は、金沢市香林坊大和で、白山国立公園の指定日である11月12日から17日まで開催され、たくさんの人に見ていただきました。

すべての作品を、しかもカラーでお見せできないのが残念ですが、ここでは入選以上の作品を紹介し、その写真の場面について若干の解説をしてみます。



(上馬 康生)

表彰式

入賞者

- <大賞> 中田 実(松任市) <優秀賞> 中橋雅之(金沢市)・山戸康嗣(小松市)
 <入選> 酒井 優(金沢市)・後上義昭(寺井町)・木村芳文(大阪府)・越村 護(小松市)・中田 実(松任市)・福島健介(小松市)・竹内富夫(小松市)・曾我隆行(岐阜県)・山戸康嗣(小松市)・西村 信(加賀市)
 <佳作> 中川保雄(鶴来町)・曾我隆行(岐阜県)・森田伸彦(金沢市)・山口 修(兵庫県)・森 正太郎(金沢市)・今井信介(尾口村)・森 正太郎(金沢市)・越村護(小松市)・中川保雄(鶴来町)・高林正男(根上町)・後上義昭(寺井町)・越村 護(小松市)・惣島文夫(金沢市)・中田 実(松任市)・富田晃子(内灘町)

石川県	82	(75%)
福井県	11	(10%)
近畿	8	
関東	4	
中京	4	
山形県	1	
計	110	人

表1 地域別応募者

花	162	(35%)
山頂部景観	99	(21%)
白山展望	52	
御来光・夕焼け・雲	42	
ブナ林	33	
その他	81	
計	469	点

表2 応募テーマ



大賞「御前にかかる笠雲」中田 実

南竜ヶ馬場から別山へ向かう途中に、油坂と呼ばれるジクザクの急登があるが、その途中から振り返るとなだらかな御前峰と、かつて溶岩が流れ今はオオシラビソなどが生える緑の斜面、その下に赤い屋根の南竜山荘が見える。



優秀賞「黒百合」中橋雅之

白山にゆかりが深く石川県の花でもあるクロユリは、山頂部の方々に大きな群落をなしている。花は茎の頂に一輪咲くのが一般的だが、2輪・3輪つくものもある。



優秀賞「雲遊水走」山戸康嗣

小松市の平野部から、まだ残雪の多い5月の白山を遠望している。空気の澄んだ秋には一日中よく見える日があるが、春から夏にはっきり見えることは少ない。



「春浅き白山」木村芳文

大汝峰から望む御前峰(右)と剣ヶ峰。5月の山頂の季節はまだ冬で、たっぷりある残雪の上に新雪がうっすら積もり輝いている。



「秋冷」酒井 優

白山に初雪が降るのは10月の上旬である。御前峰から望む大汝峰で、紺屋ヶ池(右)と油ヶ池が見え、上空は秋の雲が流れている。



「夜明けのグラデーション」山戸康嗣

木場湯は周囲に遮るものが何もなく、白山を眺めるには絶好の場所である。白山と別山のシルエットがうかぶ朝焼けの空が、水面にも映えている。

「噴泉塔」竹内富夫

国の特別天然記念物である岩間の噴泉塔は、常時噴き出る高温の温泉中の石灰分が沈着して2mを越す塔をなしている。撮影は1991年10月で、今秋は手前の塔はすでに活動が止まり、奥は活発でより成長していた。

「白山山頂初冬」後上義昭

冬の白山は毎日のように吹雪が続き、長いアプローチと深く重い雪のため、登山者はごく稀である。しかし、たまの晴れ間には、そこは雪と強風がつくる芸術の世界となり、来るものを魅了する。





「お花畑」曾我隆行

南竜ヶ馬場から弥陀ヶ原へ上っている登山道エコーラインの上部に広がる、ハクサンコザクラなど雪田植生のお花畑。雪渓の上に御前峰が横たわっている。



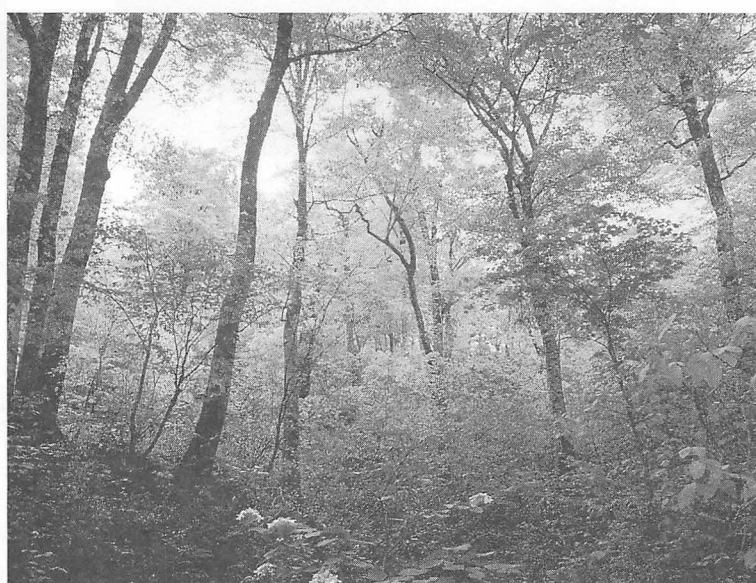
「禅定への道」中田 実

別山の山頂から望む白山。信仰の時代には、加賀・越前・美濃の3か所から、修行のため白山へ登る道があった。別山を通っていた美濃禅定道は、今も石徹白道としてほぼ昔のままのルートが残っている。



「姥ヶ滝」福島健介

スーパー林道沿いの数ある滝の中で、特に有名なのはふくべの大滝とこの姥ヶ滝であろう。日本の滝百選に選ばれたこの滝の見ごろの一つは、雪解けの水量の多い新緑の季節である。



「新緑のブナ」越村 護

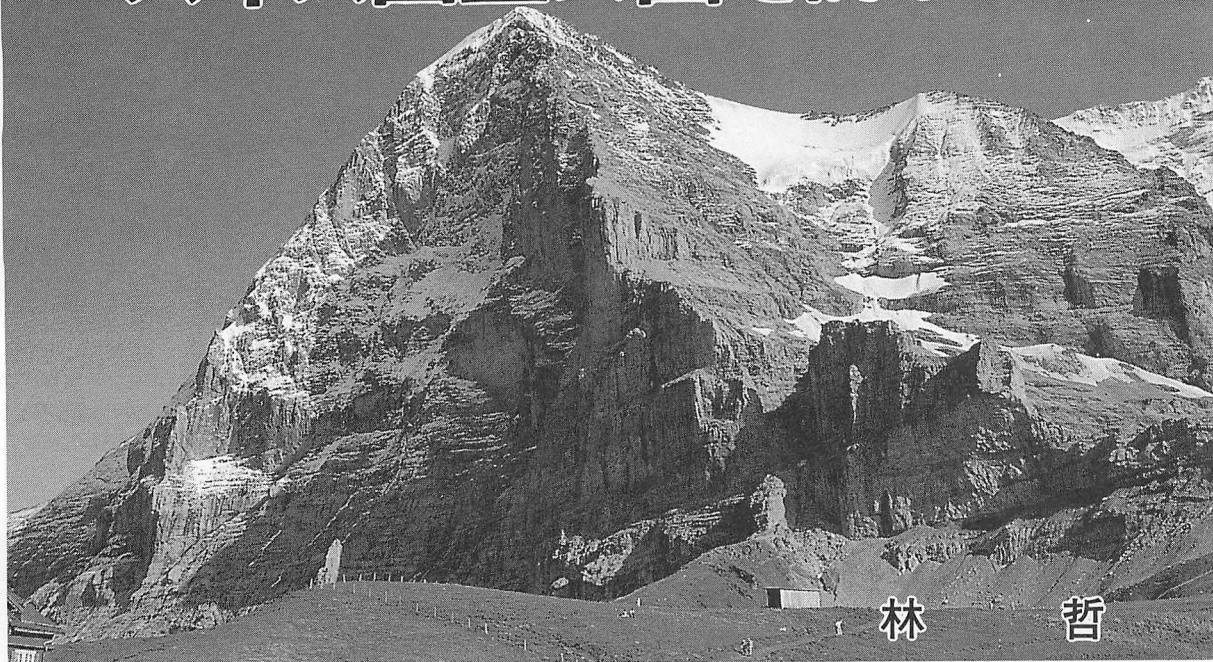
白山では標高1000mから1600mにかけては、まだ原生的なブナ林が各地に残っている。登山道沿いではチブリ尾根や中宮道が代表的である。写真は釈迦新道の5月のブナ林。

「夕景」西村 信

夏の室堂では、夕食のあと建物の南側にある2か所の展望台で、雲海に沈む赤い夕日を眺めながらくつろぐのもよいだろう。空に雲があると一段ときれいである。



スイス国立公園を訪ねて



アイガー(クライネシャイデックより)1992・9・26

1992年9月20日から10月3日までの14日間、スイスとフランスの博物館と国立公園を視察し、併せてスイスの観光都市における景観保全の手法について見学してきました。これらのうち今回はスイス国立公園について報告したいと思います。

* 国立公園事務所・博物展示施設

スイス国立公園へは9月22日から24日の延べ3日間滞在しました。スイスでは唯一の国立公園は、イタリアと国境を接するグラウビュンデン州の西部に位置し面積は約17,000ヘクタールあり、公園利用者は年間10万~15万人と推定されています。

この公園の中心的施設の国立公園事務所は牧畜業を主産業とする小村ツエルネッツの町はずれにあり、ここでは国立公園のガイドと公園内の動物・植物・地形・地質に関する博物展示解説を主な業務としていました。これはわが国の国立公園におけるビジターセンターと非常に似ているような印象を受けました(写真参照)。

この施設の博物展示は、その丁寧な英文のガイドブックによって趣旨がよく理解できるようになっていましたが、公園内の動・植物等の現在の状況や研究内容については詳細に把握しているようには見えませんでした。ツエルネッツはスイスの東南端に位置しているにもかかわらず、多数の来館者がこの施設を訪れ、長時間、熱心に展示解説を読み、メモをとる姿は、日本における博物館の利用者とかなり異なる印象を受けました。

展示解説は、生態学的な見地のものが多くみうけられ、特に印象に残った展示は「山岳地帯のコケ類の役割」と「ホシガラスとマツ類の関係」を扱ったコーナーでしたが、これはそれまでの当施設の研究成果が活かされているように思われました。

当施設のガイドは2名で行っていましたが、かなり多数の見学者が訪れることと、この2名のうちの1人は全く英語が理解できないため、一般利用者に対する応対については不

十分な感じがしました。我が国の国立公園のビジターセンターにおける公園ガイドにおいても、諸外国からの訪問者に対する英文パンフの用意やガイド担当者の英会話力の必要性を痛感させられました。

* 国立公園の野外実習コース

当公園での野外実習コースは登山とハイキングを兼ねたようなコースが予め日程が決まっており、概ね3、5、7時間の日程に分けられて実施されていました。この実習には是非とも参加したいと思っていましたが、私達が訪れた期間には7時間の本格的な登山コースしか無かったため参加できませんでした。

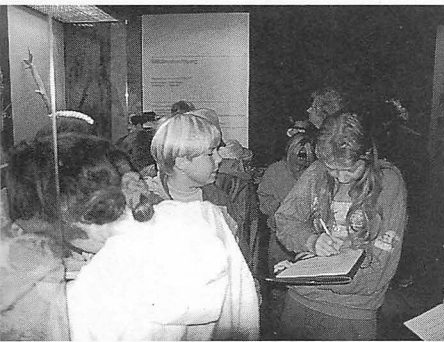
このコースは長距離の登山を主とするもので、ガイドは公園事務所の登録者（主にアルバイトの指導者）が行い、ガイド料は5時間コースで約2万円と記載されていました。

近年、エコツアーと呼ばれる自然観察ガイドが各国で行われており、このスイス国立公園でも有料のガイドを実施していましたので、このような有料のガイド事業は国際的な趨勢になってくるのではないかと思います。

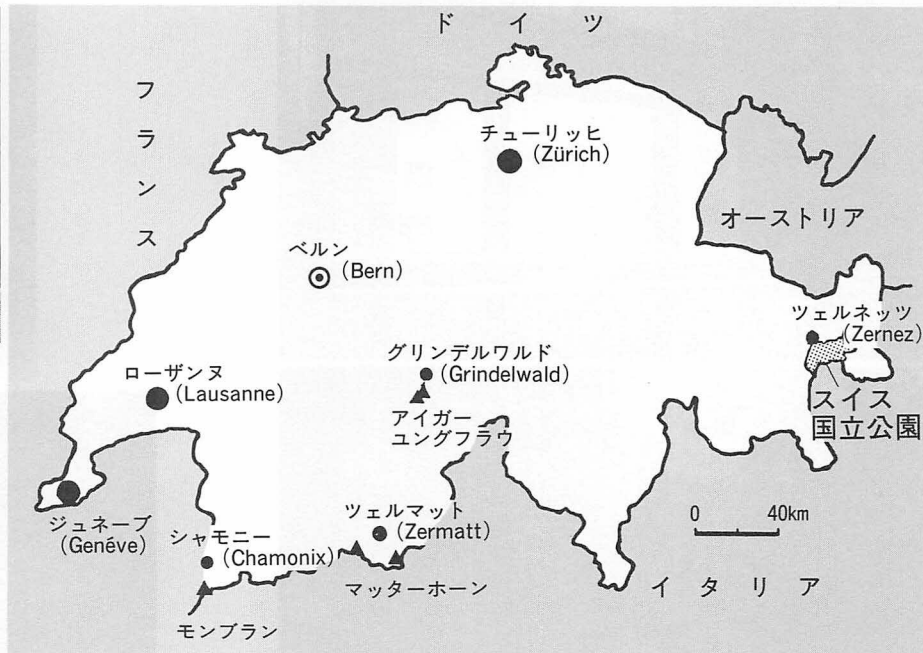
当公園内は無数のハイキング・自然散策路が整備されており、年齢や体力に応じて自由に選択して、森の散歩、ハイキング、登山、登はんなどができるようになっていました。これらのうち、スイスからイタリアに向かって走る国道28号線沿いのアプローチが良いと思われた Il Fuorn（イル・フューロン）という山岳地の約2時間のコースを選び、踏査してみました。

このコースはツェルネッツからバスで約20分の所にあり、コースの入口にはハイカーや自然観察に訪れる人のための標識板が設置され、5万分の1の地形図の掲示やカラー表示された案内は分かりやすい印象を受けました。

コースの中には所々にイヌワシ、コケ類の役割、マツ類とその種子、川と魚類・カワガラスの関係などの解説表示板があり、ウォッチャーが学びながらハイキングできるように



国立公園事務所(展示室)



スイス国立公園と主要都市

なっていました。ただ、解説言語がドイツ語とフランス語及びイタリア語の表示しかなかったので十分には理解できませんでしたが……。やはり英語表示も欲しいように感じました。

スイスでは上記3か国語とレト・ロマン語が公用語になっているので、英語表示まで手が回らないのかもしれませんが。

また、スイス各地でよく見かけましたが、特にこのコースは緩やかなコースであったせいか静寂な山中に老夫婦が二人仲よくハイキングしていたのが印象に残りました。グリンデルワルトやツエルマットなど他の山岳観光地で団体旅行者が騒々しく行動していたのと対照的で、静かに山岳探勝や自然鑑賞を楽しんでいる様子は心に残るものがありました。一般的にヨーロッパ人は家族や夫婦二人の小人数で行動し、自然の中に身を置き心地良さを満喫している感じを与えてくれるのに対し、よく見かけた日本人の団体は顕著な違いを見せ、私たち日本人の「団体による観光行動とは何か」を考えさせられました。団体行動によって私たちは本当に自然を見つめ、自分に向い合えるのかと。

*まとめ

スイスの国立公園の一部と山岳観光地に共通していたのは、非常によく登山路や観察路が整備されていたことでした。しかも、これをスイス国民だけでなく他国からの人もよく訪れて利用し、これに合わせてホテルやペンションなどの宿泊施設が整っていたことがとりわけ印象に残りました。日本の国立公園の各施設や周辺施設が、国外から来られた人達に抵抗なく受け入れられる施設となっているかどうか再点検が必要だと思われます。国際化としばしば言われる現在、わが国を訪ねる人達に、日本有数の自然美を満喫していただくために果たす役割が国立公園に携わる私たちに求められていると思います。

〈白山自然保護センター〉



国立公園案内表示板(11 Fuorn で)



イヌワシ表示板



国立公園の植生景観



林内の歩道をハイキングする老カッブル

白山の守り主…… 永井竹男さん



岩田 憲二

白峰村市ノ瀬の永井竹男さん（65才）は、白山で長年行なってきた自然保護活動に対して、総理府より藍綬褒賞を授与されました。永井さんは、所属する建設会社で、登山道補修などの「山の工事」に携わる一方で、環境庁の自然公園指導員として、白山国立公園の巡視、安全登山の指導にも当たっています。また、村の有志と団体を結成し、白山の保護と利用に関して意見を出し合い、地域の振興を図っています。白山の隅々まで知り尽くした知識と経験を買われ、遭難者の捜索・救助にも貢献してきました。ここでは、色々な面で白山と関わり続けてきた永井さんの「山の人生」を紹介します。

戦前の山の生活

永井さんは、多くの人から親しみを込めて「タケオさん」と呼ばれています。素朴で飾らない人柄は誰からも好かれ、話を聞いていても、その穏やかな性格がこちらに伝わってきます。

竹男さんの人生の中で、これまで体験した最大の出来事の一つは、昭和9年の大水害だそうです。小学校1年生の時の事ですが、60年近く過ぎた今でも、当時の様子がはっきりと頭に残っているそうです。昭和9年7月11日未明、手取川を襲った大水害は、濁流と共に多くの人命・家屋を奪い去り、甚大な被害を流域にもたらしました。白峰村内だけで、罹災戸数218戸・罹災者1,101人（内、死者54人・負傷者15人）の被害が出ました（白峰村史より）。竹男さんは、その日たまたま祖母の家に泊まっていて、その為よけいに危険な状況に置かれていました。竹男さんの家は大杉谷川支流の北俣谷沿いの高地にあり、あまり被害は受けなかったのですが、祖母の家は大杉谷川と牛首川合流点近くにあったので、流されてしまいました。近くにあった河内谷分教場も洪水で流されました。竹男さんは、裏山の少し高台にあったマンゾの家へ逃げ、助かりました。少年期のこうした体験により、「自然は、いったん荒れると手がつけれない。」という思いが強烈に残りました。

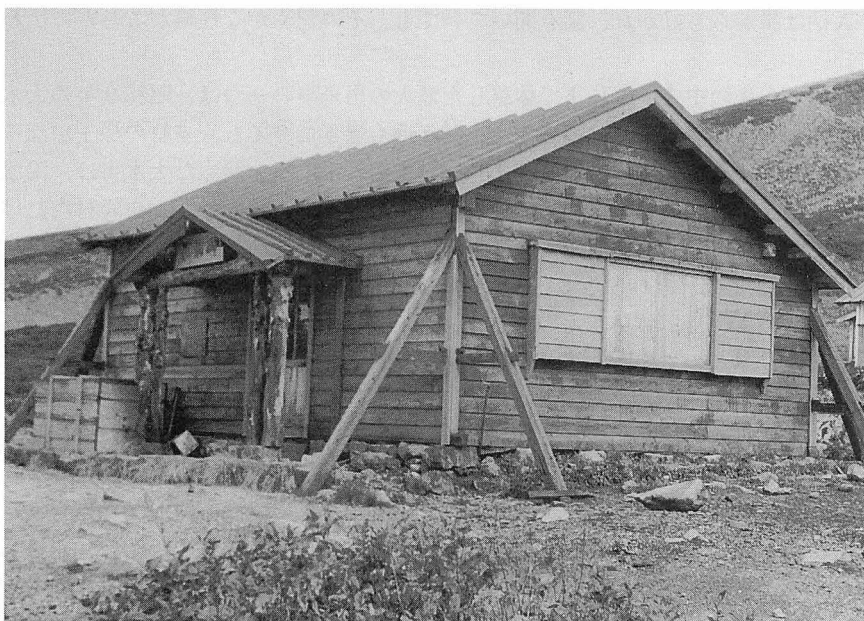
その後、学校を終えると同村市ノ瀬の故・永井喜市郎氏経営の旅館で働き始めました。太平洋戦争が始まる少し前の事です。永井旅館は、先の大水害の翌年の昭和10年に、白山登山客と工事関係者を主な宿泊客として創業しました。竹男さんはここで、旅館の自家用の炭焼き、宿泊客の世話、そして白山登山客のガイド等を担当しました。当時の燃料は炭（と薪）が普通で、竹男さんも既に父親から炭焼きの技術を習得していたので、旅館で炭

焼きを担当しても、すぐ焼くことができたそうです。その後、昭和20年代末まで炭を焼き、30年代半ばには炭を燃料として使わなくなったそうです。また、登山客のガイドとして夏期は忙しく、旅館に宿泊した客の荷物を背負い、山頂部まで道案内をしました。戦前の山頂部の宿泊施設は石室・板張りの板葺屋根で、食料として一人当たり5合/日の米を持参するなど、現在とはかなり違う施設・業務内容でした。こうした生活を送りながら太平洋戦争を迎え、勤労働員に駆り出されたりしながら終戦となりました。

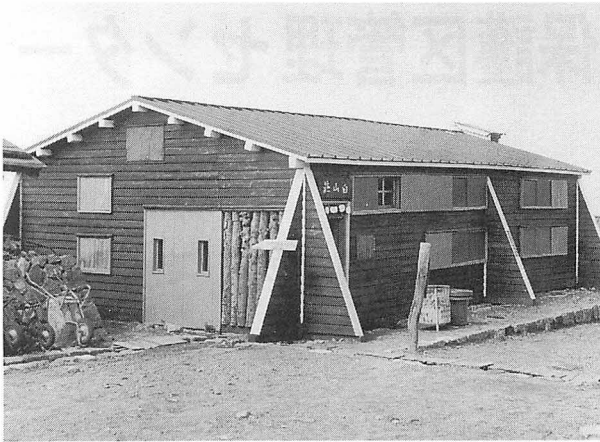
戦後の山の生活

戦争が終わって、世の中が復興に向かっている時期、竹男さんの生活は元通り永井旅館を中心に展開しました。従来の登山ガイドと旅館の世話に加え、夏期のみ歩荷（ポッカ）と呼ばれる人肩荷役運搬業を担当し、山頂部宿泊施設用の食料や資材を市ノ瀬から運び上げました。米俵や石油缶など、一度に20貫(75kg)の荷物を背負子に載せ、ネンボウと呼ばれる杖をつきながら、ゆっくりと山頂目指して登ったそうです。午前3時頃、懐中電灯を照らしながら市ノ瀬を出発し、途中7ヶ所で荷をおろして休憩し(内、2ヶ所で食事)、午後2～3時頃室堂に到着することが出来ました。山道を歩くときは、50m－100m毎に小休止をとりましたが、このときは荷を下ろさず、ネンボウで荷を支えるようにした腰掛けスタイルで体を休めました。こうした山頂部への歩荷業は、ヘリコプター空輸が導入された昭和40年頃まで続きましたが、竹男さん自身は本業の旅館業が忙しくなったので昭和30年頃には止めていました。昭和27年の白山登山者数は3,750人、30年には約1万人、34年には1.3万人と急増し(白峰村史)、夏期は歩荷よりも旅館の登山客の世話が中心になりました。

昭和30年代半ばになると、旅館業(永井旅館)に加えて建設部門(永井建設)も営業を始め、主として白山の登山施設の建設や補修を請け負いました。昭和30年、白山は国定公



白山室堂宿泊施設 — 御前荘(昭和25年：撮影者不詳)



白山室堂宿泊施設 — 白山荘(昭和32年：撮影者不詳)

園に指定され、更に37年には国立公園に昇格し、登山道や道標など公園施設の整備工事が増えて、竹男さんの仕事も一層多忙となりました。竹男さんによると、20年代は高山植物のお花畑への立ち入りにはあまり注意が払われず、国定・国立公園に指定された30年代以後は段々と登山者の意識も向上してきたそうです。

昭和40年代以後、現在の室堂センターが完成(41年)して登山の管理体制が整い、登山施設や登山地

図も整備され、何度も白山登山の経験があるベテランが増えてきた事などから、竹男さんは登山ガイドの依頼を受けることはほとんど無くなりました。その一方で、竹男さんは昭和41年から環境庁(当時は厚生省)の自然公園指導員を委嘱され、安全登山や自然公園施設の適正な利用指導等の面で活躍しています。それまでのガイドという個人のための仕事から、自然公園指導員としての公的な立場から白山と関わりを持つようになりました。まるで自分の庭のように白山を知り尽くしている竹男さんにとっては打って付けの「公的業務」といえ、忙しい仕事の傍らで絶えず登山者の安全や遭難防止、そして適正な公園利用等の指導にあたっています。

白山を守る

自然公園指導員として白山の自然環境や登山施設、そして登山者を守るのはもちろんですが、それ以前に、地元で生まれ育ち、白山を仕事の場としてきた者として、竹男さんは「山」と関わり続けてきました。その代表的なものが、「ブナの会」の創設です。昭和54年に設立されたブナの会は、「白峰村の自然を守り、白山の登山施設を整備して、その利用を促進し、併せて村の振興と活性化を図る」事を目的に、当初は村内在住の自然公園指導員を中心に設立されました。それまでの経験や人望から初代会長には竹男さんが就任し(現在は織田捷二会長)、様々な活動を繰り広げてきました。中でも活動の柱となったのは、会の名前の通りブナ林を保護することです。これまで、釈迦岳と岩屋俣谷の国有林内のブナ林伐採に対し、中止を求めて営林署当局と交渉しました。岩屋俣谷の場合は、伐採予定の立木を地元の白峰村に買い取ってもらい、結局ブナを伐採しなくて済みました。竹男さんは、戦前にはブナの木を伐って炭に焼いたり、コシキ(雪掻き板)やクワ棒に加工したことがあり、当時は人間が利用するための木となっていました。しかし最近では、白山の豊かな自然の象徴として、ブナ林の保護が叫ばれる時代となりました。

これまで紹介したように、竹男さんは常に山と関わりのある仕事に携わり、その内容は時代の流れと共に変わりました。戦前から昭和30年代までは炭焼き、30年代以後は建設業、そして最近では自然保護というように、白山麓という小さな世界においても、外部の社会の変化に対応して、その時々で白山との関わり方が様変わりしてきました。しかしながら、故郷の「山に生きる」という竹男さんの生き方自体は、今も昔も変わっていないと思います。

〈白山自然保護センター〉

国設白山鳥獣保護区管理センター

永吉 興・殊才 実

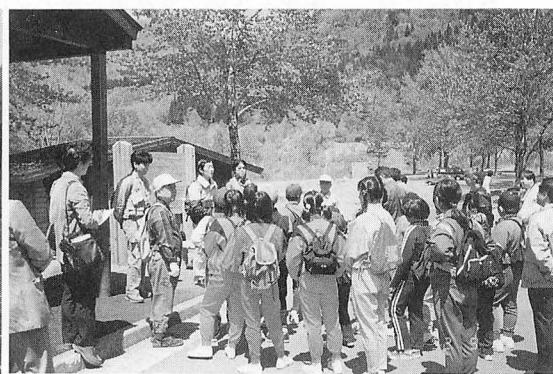
白山の登山基地として知られる白峰村市ノ瀬地区には、登山センター・自然観察路・野営場・多目的広場・公衆トイレ・駐車場等の公共施設が整備されていて、登山者や一般観光客に利用されています。そして新たに、国設白山鳥獣保護区管理センター（以下、市ノ瀬ステーション）が、平成4年5月10日にオープンしました。木造平屋建て（延べ床面積：97.2㎡）のこの施設は、環境庁により整備されて石川県が管理し、夏期（5月10日～11月5日）のみ開館します。

市ノ瀬ステーションには事務室、資料室、展示室兼レクチャホールがあり、白山に生息する野生生物の紹介と展示、自然観察の指導、周辺情報の提供などを行なっています。展示室兼レクチャホールには動物の剥製、バードカービング、各種解説パネルが設置され、白山に生息する生き物達を紹介しています。また、昆虫の生態や鳥類のビデオ上映も適宜行ない、そして自由に自然学習が出来るよう各種図鑑（鳥・植物・昆虫・動物）も揃っています。この他の業務としては、市ノ瀬が白山国立公園の登山の重要拠点であることから、登山指導や利用案内も担当し、併せて白山の管理上重要であるゴミ持ち帰り運動の推進も行なっています。

そして市ノ瀬ステーションの重要な仕事として、野生鳥獣の保護を図るための普及教化業務——具体的には自然観察会の開催——があります。市ノ瀬ステーション周辺には、所要時間1時間程度の自然観察コースが2つ（白山山頂部が遠望できる白山展望台と、植物観察ができる自然観察路）整備されています。白山展望台では、林の中の観察と白山山頂部付近の遠望をテーマとして利用できます。もう1つの自然観察路では、春から秋まで植物の観察ができるようになっています。春はミズバショウ、サンカヨウ等、夏はホタルブ



管理センター

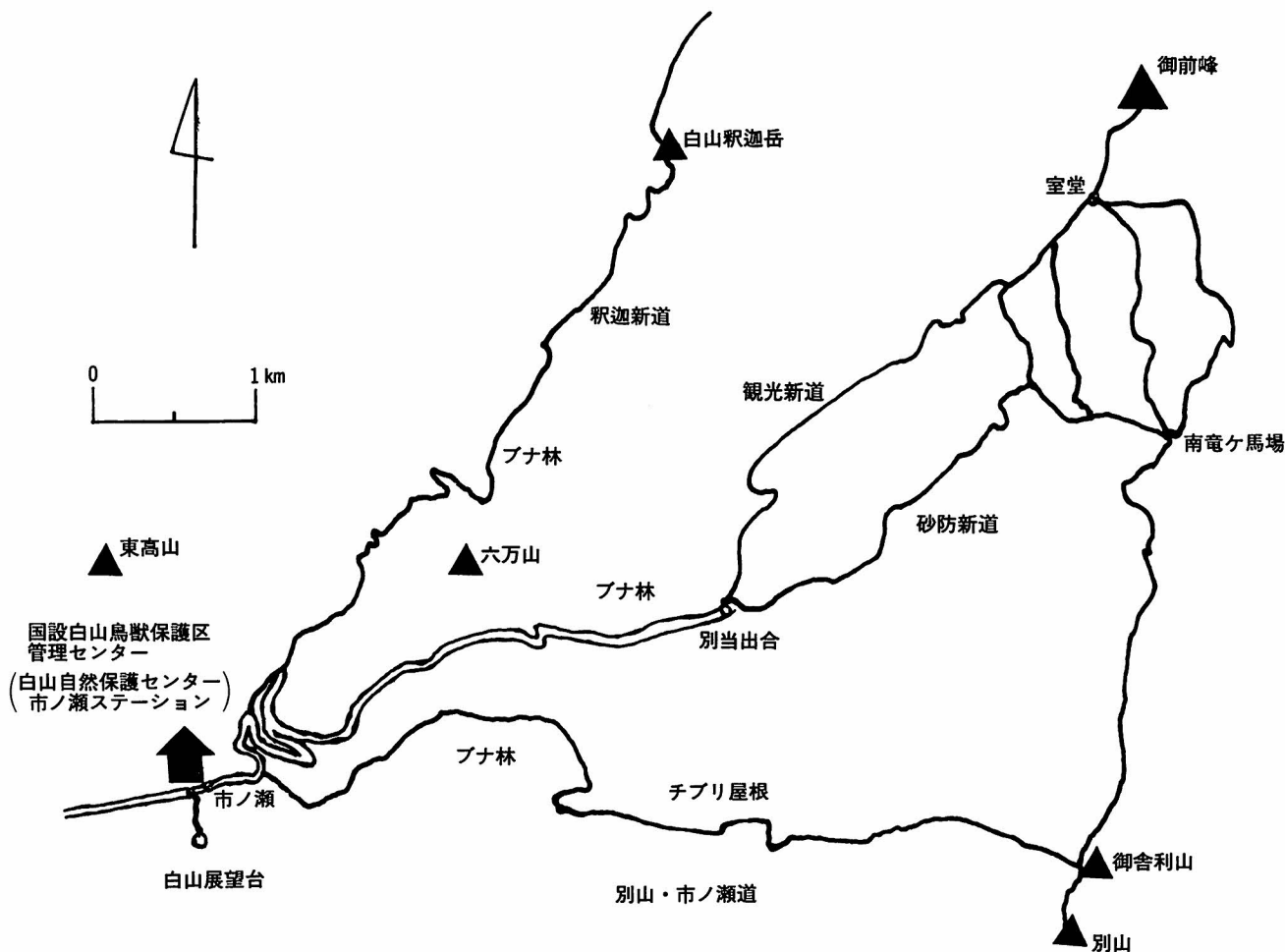


自然観察会

クロ、ササユリ等の林床植物の観察、秋はミツバアケビ、ヤマブドウ等の実のなる木の観察が出来ます。その他、市ノ瀬を登山基点とする別山・市ノ瀬道（チブリ屋根）と釈迦新道には広大なブナ林があり、この登山道を利用したブナ林内の植物観察、バード・ウォッチング等が楽しめます。この4つのコースには色々な野生鳥獣のフンが落ちております。フンはそこに野生鳥獣がいたという証拠であり、私たちにその生態を教えてくれる貴重なものです。フンを探しながら歩くのも一つの楽しみです。市ノ瀬はこのような豊かな自然環境に恵まれ、自然観察会を開催するには最適地です。この恵まれた環境を生かして、市ノ瀬ステーションが中心となって、野生鳥獣の保護思想、そして更には自然保護思想の普及教化業務を行なっていきます。

いままで、旧・市ノ瀬駐在所で行なってきた業務に、自然観察会という新しい仕事が変わり、市ノ瀬ステーションの仕事は一層充実した内容となりました。月に一回程度の日帰り自然観察会や、市ノ瀬ステーション周辺を案内する1時間程度の気軽な自然観察会（随時）を開催していますので、市ノ瀬の自然について一緒に学んでみませんか。平成4年度には5,016の方が市ノ瀬ステーションを利用されました。今後共一新された市ノ瀬の利用をお待ちしております。

〈白山自然保護センター〉



市ノ瀬・白山周辺図

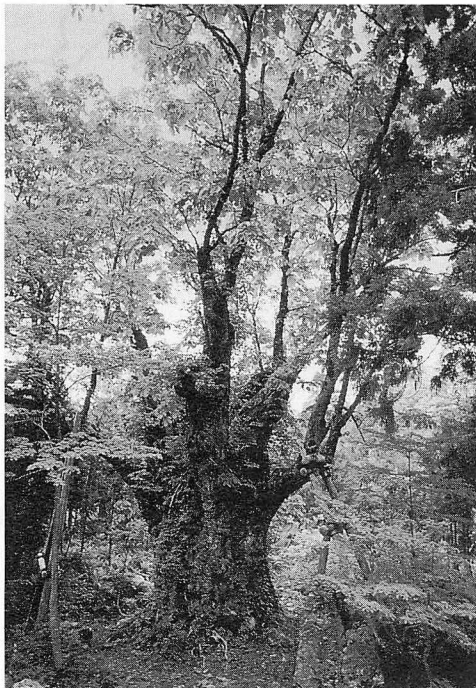
白山の巨木(3) トチノキ・ケヤキ

田中敏之

平成3年11月22日、白峰村大道谷の「太田の栃」は、文化庁の文化財審議委員会により、国の天然記念物に指定するよう答申され、正式決定を待つばかりとなっています。この「大栃」は、幹周13.0mと二位以下を大きく引き離しています。樹幹は空洞になっていて大人20人が入ることが出来、内部は薄暗いが、上部の折損した数個の穴から見える空（宇宙）は美しい。このトチノキは樹齢1,300年位といわれ、あちこち朽ちてきてはいますが、今でも春になると花を咲かせ秋には実をつけています。この自然の営みには永遠の生命を感じざるを得ません。現在、トチノキの林は水源林や防雪林として、また、家具材や食糧として人間生活を支えています。白山麓では、トチノミからトチモチやセンベイに加工され、地元のお土産品になっています。

ケヤキについては、白峰村風風の岩根社に巨木が2本（幹周7.8m／樹高40mと幹周5.2m／樹高36m）ありましたが、樹木の本体は朽ちてしまいました。いま生育していれば石川県では神明宮（金沢市）のケヤキに次ぐ巨木でした。ケヤキは比較的温暖な肥沃地に生育し、人間生活の中に深く根をおろしています。例えば、屋敷林・社寺林として植栽されて防風林の役目を果たすと共に、涼風を誘い（真夏は市街地より4～5℃も低いという）、小枝は燃料、落葉は堆肥として使われてきました。現在は風景樹として広く植栽されています。また木材としても材質は堅硬で、心材が赤褐色をしているものは特に良質とされています。心材が黄色っぽいツキ（アオゲヤキ）は材質が劣るケヤキをいい、楓の字を書きます（元来、ツキはケヤキの古名ともいわれています）。また、木肌が美しく、日用品や美術品として利用されています。神社仏閣の建築には欠かせない木材であるため、この地方の巨木も、県内は勿論、京都の寺院建築の献木として運搬されました。このことは木遣音頭（白峰村史下巻）の節々に偲ぶことができます。

<石川巨樹の会>



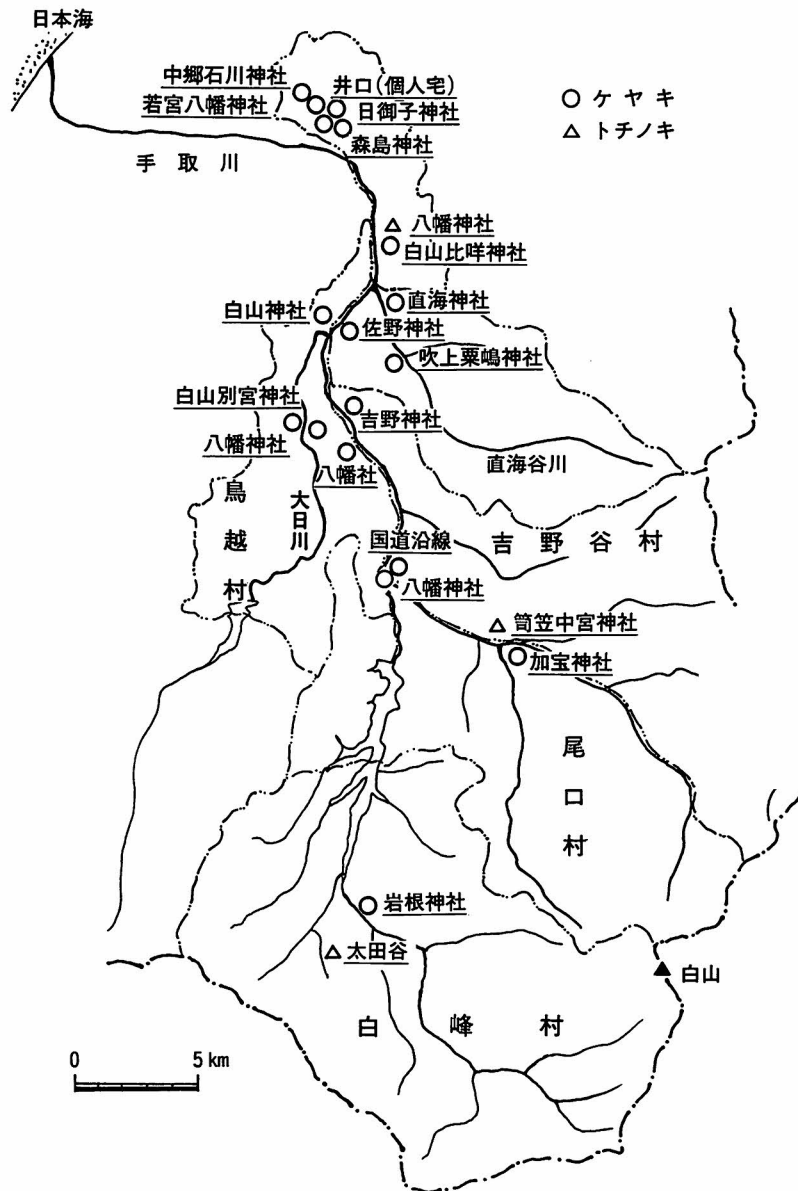
太田の大栃(白峰村太田谷)



ケヤキ(鶴来町井口町 林宅)

白山麓の天然記念物の指定状況（トチノキ・ケヤキ）

名称	幹周	樹高	所在地	指定年月日	名称	幹周	樹高	所在地	指定年月日
太田の大榎	13.0	25.0	白峰村大道谷支流太田谷	S.39.2.21(村) 現在、国に申請中	榎	6.8	22.0	吉野谷村吉野吉野神社	S.46.11.3(村)
七葉樹 (トチノキ)	5.6	23.0	吉野谷村中宮筒笠中宮神社	S.46.11.3(村)	榎	4.5	17.0	吉野谷村下木滑(国道沿い)	S.46.11.3(村)
八幡神社のトチ	3.3	25.0	鶴来町八幡町八幡神社	S.53.2.22(村)	榎	2.5	16.0	吉野谷村下木滑(国道沿い)	S.46.11.3(村)
井口 榎	5.4	31.0	鶴来町井口町林 吉昭宅	S.53.2.22(町)	岩根神社の大ケヤキ	5.3	19.0	白峰村風嵐岩根神社	S.18.8.24(村)
白山比咩神社大榎	7.0	44.0	鶴来町三宮町	S.29.11.1(町)					



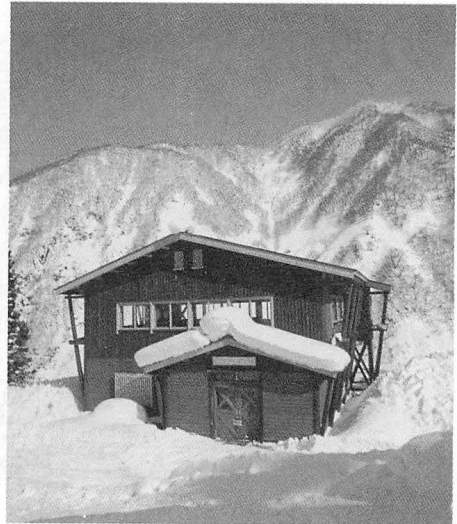
白山麓のトチノキ・ケヤキの巨木の分布

「巨樹・巨木調査報告書」環境庁(1991)より作成。ただし、神社等の場所が特定できる巨木のみ記載。

たより

白山麓にも冬が訪れ、雪の季節になりました。中宮展示館は11月10日に閉館し、来年春の開館までお休みします。今年の入館者数は46,321人で、前年より約1割増加しました。中宮展示館と入れ替わりに、11月20日にブナオ山観察舎が開館しました(写真)。観察舎対岸のブナオ山斜面が雪で真っ白になるこれからは、カモシカやサルを観察シーズンとなります。荒天時以外、当センター係員が常駐していますので、ぜひお越しください(施設の詳細は当センターまで)。

今度の「はくさん」では、白山国立公園指定30周年記念事業の一環として催された「白山の自然」フォトコンテストの大賞・入選作合わせて13点の写真を紹介しました。色々な姿の白山を撮影した力作揃いだと思います。この他、当センターの林 哲専門研究員がスイスの国立公園の管理状況を報告しました。国によって国立公園の管理・運営は異なりますが、白山でも見習うべき点は見習って、他所の長所を取り入れていきたいと思えます。5月10日に開館した、国設白山鳥獣保護区管理センターについても、本号で紹介しました。白山の野生鳥獣の展示・解説や自然観察会を開催する施設で、開館1年目の今年は、11月5日の閉館までに5,016人の利用者がありました。白山登山、あるいは市ノ瀬周辺のハイキングなどの際に、お立ち寄り頂ければと思います。(岩田)



ブナオ山観察舎

目 次

表紙 大汝峰	東野外志男.....	1
「白山の自然」フォトコンテスト	上馬 康生.....	2
スイス国立公園を訪ねて	林 哲.....	6
〈山に生きる・13〉永井竹男さん	岩田 憲三.....	9
国設鳥獣保護区管理センター	永吉 興・殊才 実.....	12
白山麓の巨木(3) トチノキ科・ニレ科	田中 敏之.....	14
たより		16

はくさん 第20巻 第3号 (通巻85号)

発行日 1992年12月25日(年4回発行)
編集発行 石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村木滑
〒920-23 Tel 07619-5-5321
印刷所 株式会社 橋本 確文堂